
季風《かぜ》に散るらむ

虚空蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

季風に散るらむ

【ZPDF】

Z0667E

【作者名】

虚空蒼月

【あらすじ】

取り残され続ける者、見送り続ける者、求め続ける者、奪われ続ける者。俺はどちらも知つて居る。俺だけは、必ず、側に居る。

序・血塗れの娘（前書き）

おはようございます。こんにちわ。こんばんは。
月と申します。初投稿なのに初連載です。生活時間の都合上、いつ
の間にか更新します。はじめはじやんじやんけなしてください。
そのあと生易しくして下さい。時代小説のつものは無いので時代考
証ぶつちぎりです。イメージ全開です。戦闘があればやはり血は流
れます。が極力残虐にならないようにしたいと思います。
まずはお試しあれ。

虚空蒼

序・血塗れの娘

……そのむすめの死顔は、驚く程に安らかであった。

亡骸のすぐ側には、只、茫然と立尽くす若い男。むすめよりも幾分幼さの残るその若者は、こめかみが引き吊る程に奥歯を噛み締め、そして、己を責めて居る態。

娘の亡骸に外傷は無い。が、喀血したものとみえるおびただしい血。意地ずくに生き抜いた娘は、病であった。

『……間に合わなかつた……！』

宿場町をついで出たばかりの街道である。空は何処までも碧く高く、しかし、暖かな日の昼過ぎに、枝垂桜のその下で娘は息を引き取つた。

戻ることも出来た筈だ。

しばらく自分で待つて合流する事も出来た筈だ。

なのに何故。

「こんな処でッ！」

見れば、辺りの死骸はいずれも頸筋を一太刀に始末している。その数、十七、八体。なにかを護り、そして娘…ぬえと云つていた…は、病に倒れた。

「ねエ、おサムライさん。…もし…もしもわたしがおつ死んだら
サア…、」

と、向い合せに腰掛けた処で、にやにやしながらぬえは切り出した。

「わたしの荷を開けて、見苦しいもんは捨てておくんなさいな。おんなが行き倒れたあとに恥イ搔くのアぞつとしないやね」

「なにを云やがる、縁起でもねえ。そんなに死んだ後が拙けれア、生きてるウチに捨てつちまいま」

と、これもまたにやにやしながら若い浪人…まだ幼さの残る顔立ちである…鮫島七右衛門は応えた。

「…嫌ですよ七右衛門様。生きてるあいだはせいぜい遣いますのサ。」

ふた月程前に同道する様になつてから、幾度か繰り返したやり取りである。しかしその実、七右衛門はぬえの云うところの見苦しいモノが何かは知らない。

中途半端な侍の、しかも一人目の妾腹の、更に七番目の末っ子に生まれ、憐れな母と貧しさに因る、義理と呼ぶのも不愉快な親族からの理不尽な虐待の末、喧嘩と道場破りに明け暮れて、さむらいのか野良犬なのか判らぬ暮しをするうちに、ぐれていのも莫加馬鹿しく、せめて納得、合点、得心して野垂れ死にでもなんでもしてやれ、とばかりに出奔したのが十八の秋。一年前の事である。

武士の気位等は生まれつき持ち得ない育ちのお陰で、ふらふらしながら百姓、猟師、漁師らの手伝いをしては旅を続けている。

一方、ぬえは、奉公先の武家が断絶したとかで暇を出され、故郷へ帰ろうと思つて居たら、彼女は奉公人であるのに、その家に貸し付けた借金とやらの取り立ての為にわざわざ呼び出された高利貸しの屋敷で、主の妾にされかけたところを自らの手で張り倒し、それ

だけならまだしも、床の間の飾りからなにからをひとつおつぶち壊してそのまま用水路の舟で逃げだしてきた程の美貌が災いしてか、故郷へ戻る道すがら似た様な騒動を起こしながらやはり半年近くになると云つ。

色々と偽りであろう。

ただ、そういう事にしておいてくれ、という心情だけは無理のある明るさから汲み取る事が出来た。

出合つたときほその[冗談]の様な身の上嘸などよりも、十八の齡より不必要に老成してしまつた血まみれの、しかしそれでも年頃の、うつくしいむすめが、そこには居たのだから。

《続く》

序・血塗れの娘（後書き）

んです。

かわいそつなだけっての嫌な

序　二

鮫島七右衛門がぬえと名乗る娘に出くわしたのは、年が明けて小正月も過ぎたある日の事。

行き先を思い付かず、街道を逸れて林のなかをぶらぶらしていた。藪を抜けると、どうやらどいぞの寺内の敷地らしく、大きく拓けた庭に出た。

警固の者にでも見咎められでは面倒…と思つたが、見渡してみると、まるきり線香の香りもしなければ人気も無い。じく最近無住になつたものとみえ、煤けているが荒れではない。

どうやら本堂の裏手らしきところからぐるりと建物伝いに表に回る。無住になる程であるから格式は高くあるまい。

とりあえず水でも遣つて人心地着いつと井戸の脇まで足を運ぶ。

（今日はこじらで手を打つとするかの…）

顔を洗つて首筋を拭つと、要は面倒臭くなつてきた。屋根がある事 자체が僥倖である。よし、ここにしよう。

とすればやはり本堂に上がり込んで仏の前で過ごすのがせめてもの気休めにならうか。ひとつ汗んで戸を開ける。

閉める。

驚いた。

「んどうすうりと開けてみる。

やはり居る。

気配はあるで感じなかつた。

しかしながら。

確かに、複数、居る。

坊主頭であつたなら、なにもこれ程驚きはしない。

いや、せめて頭があつたなら。

死んで居るのだから気配がないのは当然だが。死臭も無いとは
どういうことか。死んで居るのだから気配がないのは当然だ
が。死臭も無いとはどういふことか。

辻棲が合わぬ。

無住の寺の本堂に、首無しの体がハツ。

妖か。

まさか。人形？

意味が判らぬ。

下手人は？

とうに居るまい。

ならばせめて弔つのが一宿の義理であらへ。

南無阿弥陀仏。
觀音様だつた。

序 参 在りたい在り方

事の次第は兎も角も、八体の首無しの体が何なのか、とりあえず念佛混じりに手を合わせ、本堂の中を見渡してみる。

袈裟も衣も着ては居ない。何か願掛けの講中か。
といつて掛け金を争つた様子も無く、中央奥に有る觀音像を囲む様にがらんとした堂内に倒れているばかり。

男ばかり八人、裾をはだけて息絶えて居た。

(「こつア ビツやら…）

「御察しのとおりで、アゼこますよ、お侍様」

不意に声がした。

驚いて振り向くと、七右衛門よりやや年上であるうか、引詰め髪のおんなが立っていた。

「こつア おどろかしちまつてあいすいませんねエ。でもねぐらをお探しなんでしたら、こんな外道の転がつてるとこだけア おやめなさいまし。」

名乗りもせずに女は云つた。

「そいつア ビツこついたい？」

七右衛門も気にせず問う。

「寄つてたかつてむすめをひつにかしあまおうとした病犬やまこぬども
サ。觀音様の罰です。」

「するてHとおまえさん、IにひらH…？」

「まさか。無理矢理貸し付けた借金とやらのカタにかつせりつ
た娘を 口き売る前に酔りもんにしようつてH とにかく通り掛つまし
たのサ」

「じゃあ殺つたのア オめえか？」

「…性分でしてねH…寄つてたかつてつてのがどつこむ。ほつ
とけないものア放つとけないんです」

「…やうか。そうこうつ事なら仕方がねえ…てなわけにもいかね
えんだろうが、ハナシは解る。いいウテだな。」

「…ソリ亞どうも。…で、どうなさいます…？ わたしをお
縄にでもなさいますか？」

すうつと皿が細くなる。

「どうもしねえよ。殺つてるとこも見てやしねえし、こんなお
かしなホトケも見た事がねえ。突き出し様がねえだろつ」

それに、と七右衛門は続けた。

「おれならこなもんじやすまさねえ」

「…ありがとウザります。なにしろお宿をお探しなら、もち

つと先に宿場が「ござります。あつかましい様ですがそこで、も少し
嘶を聞いたやうだけませんか」

「まあかまやしねえが、…おおそりだ、おれは鮫島七右衛門と
云ひ」

「礼儀知らずと侮られるのも嫌なので先に名乗ると、女はあらい
やだ、と笑つて。

「いきおいでわたしばっかり喋つちまつてあいすこませんね」

口数を恥じる様に名乗つた。

「わたしア、ぬえ、つてんです」

それが別れの始まりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0667e/>

季風《かぜ》に散るらむ

2010年11月24日15時58分発行